PROJECT

手話の変化をたどる ──比較方法の手話語彙への応用にむけて

文 菊澤律子

機関研究 ●「マテリアリティの人間学」領域　手話言語と音声言語の比較に基づく新しい言語観の創生（2013-2015）

言語の歴史研究とは？

「語族」や「言語の系統関係」という語は、なじみがあるようでいて、一般にはその意味があまり正確には理解されていない。「語族」とは、共通の祖先から発達したと考えられる言語のグループのことである。「言語の系統関係」とは、各語族に含まれる言語どうしが、その発達史の中で相互にどのような位置関係にあるかのことであり、一般的には系統図で示される。ここでは、「言語は変化する」ことが前提となっており、歴史言語学では、言語を生物の進化になぞらえ、現在話されているさまざまな言語が共通祖先からどのように発達してきたのか、その分岐の経緯や具体的な変化の過程をとらえようとする。

言語が同じ系統に属するかどうかの判断は、共通祖先から受け継がれた因子を共有しているかどうか、による。生物が同じ遺伝子を共有していても形態が違っていたり、逆に、見かけが似ていても系統が近いとは限らないように、言語の場合にも、表面的な特徴が似ていても系統が同じであるとは限らないし、見かけが違っていても互いに系統関係が近いこともある。すなわち、形態の類似性は系統関係の判断の手がかりにはならない。

それでは何を見れば、複数の言語の系統関係がわかるのだろうか。音声言語を対象とした分析では比較方法という手法が使われる。同じ系統関係にあると考えられる複数の言語間に規則的な音対応が見られるかどうか、その対応がどう変化したか、を分析する。音とその配列の変化を追跡する方法で、いってみれば、音の単位が「遺伝子」に相当する。この音の変化については、起こりやすいものと起こりにくいもの、またあり得る方向性などが一般化され、知識として蓄積されている。たとえば、日本語でｐがｈに変化して、「パパ」が「母」に化けたことはよく知られている。これは、ｐ＞Φ＞ｈ＞？＞Ø という一般的な変化の一部である。またこの変化はさらに「弱化」、すなわち、「強い」音から「弱い」音への変化として一般化され、近畿地方で起った「～しない」という意味の「せぬ senɯ」から「へん hen」の変化に見られる ｓ＞ｈ と同じ性質を持つ変化であることもわかる。変化の規則性の解明とその一般化により、言語変化の存在を予測したり、変化の方向を特定したりすることができるようになる。通時的には言語変化について、共時的にはゆっくり発音するときと会話などの発話における発音の違いが説明できるようになり、言語の歴史研究のみならず、バリエーションの存在の予測につながる。

手話言語を対象とした歴史研究と問題点

言語学は音声言語の観察に基づいて発達し、研究が進んできた。歴史言語学においても手話言語の歴史に関する研究手法はまだ存在しない。まず、比較単位がはっきりしないため、「比較方法」を手話言語にそのままあてはめることは困難である。音声言語では、言語音があくまで１本のつながりとして時間軸に沿って発せられるため、そのつながりを音の単位に分解し、比較することができる。手話の場合には、複数の表現が同時に並行して進むため、音声言語のように、言語Ａと言語Ｂの要素を一対一で比較することができない。このように、手話の音韻的要素を通言語的に抽出できる形になっていないことが、比較方法の応用が困難である直接の要因となっている。

語彙統計学を応用し、手形、手の向き、動きの３つのパラメーターについて「同じ」「似ている」「違う」を点数化し言語の近い・遠いをみることを試みる研究はあるが、この方法は、言語の歴史研究という視点から見ると、さまざまな問題がある。まず、測っているのが形態上の類似性であり、「遺伝子」の共有が担保されていないこと。次に、具体的な変化の経緯が一般化されないため、変化の傾向や性質についての理解につながらないこと、などである。

そもそも手話表現の記述では、画像やビデオを用いて違い

写真１　日本手話（標準語）の「数字の９」（S_5SC_{1234}）。

写真２　日本手話（鹿児島）の「数字の９」（SC_{1234}）。

写真３　日本手話の「本当」（S_5SC_{1234}）～（$S_{(5)}SC_{1234}$）。

写真４　日本手話の「歩く」（$S_{(5)12}$）。

※カッコ内は指の形を記号化したもの。各指は親指から小指へ順に 5,1,2,3,4 と数字で表される。S は伸びている、SC は伸びており、かつ、互いに接触していることを示す。記述のない指は無標形（こぶしを握った形）である。番号がカッコ内に表示されている場合は必須ではない（該当の指が無標形で現れてもよい）ことを示す。

を説明し、それでよしとすることが多い。これは、音声言語の研究において音を聞かせることに該当し、事例は積み上がるが、抽象化、一般化をすることが難しく、変化の存在を予測したり、傾向を一般化したりすることにはつながらない。既存の手法にとらわれる必要はないが、手話言語における変化を概念化し、科学的な知識の蓄積に結びつけるための記述方法を確立する必要はあるだろう。

関連する問題点としてよくあげられるのが、音声言語が垂直伝播、すなわち、世代から世代へ直接継承されるのが一般的であるのに対し、手話言語についてはかならずしもそうではない、という点である。両親がろうである、いわゆる「デフ・ファミリー」の場合には、音声言語同様、言語が親から子へと伝えられるが、ろう児の多くは聴こえる親を持っており、手話をろう学校など家庭の外で身につけることになる。言語の伝播過程と系統論との関係については、これまでにも疑問が呈されてきたが、手話言語を研究対象に取り入れることで、より具体的な議論に結びつくのではないかと思われる。

手話言語の歴史研究の方法をさぐる

国立民族学博物館プロジェクト研究員である相良啓子は、日本手話と、日本手話から派生した歴史を持つ台湾手話と韓国手話の数の表現を比較し、その中に見られるさまざまなバリエーションについて研究している。これらの言語は分岐してからの時間が浅いこと、また数詞は、その意味的な性質上、手の形や動きのみで（非手指標識などの並行する表示なしで）記述できることなどから、違いを観察し、変化の一般化を試みるテストケースとするにはよい素材である。相良と菊澤は、これらの性質を利用し、歴史的に関連がある（と考えられる）手話表現間の共通点と相違点を記号化する方法を考えつつ、変化を一般化できる手話表現の例についての検討を進めている。まずは、手の形の観察のみに基づいて把握できる変化の性質を理解し、その限界を認識することで、他の要素（手の動きや位置など）がどのように絡んでくるのかについて特定してゆく、という手法である。以下では、観察された中から「親指の中立化」という現象について述べる。

まず、「数字の 9」は、一般的な日本手話では、手のひらを自分の方に向け、親指を上向きに立て、残りの 4 本の指をそろえて横向きに表現する（写真 1）。ところが、鹿児島で使われる方言では親指を折ってそろえて横向きにした 4 本の指だけで 9 を表現してもよい（写真 2）、すなわち、親指は立てても折ってもどちらでもよい。さらに、手形が関連する「数字の 90」を調べると、広い地域で親指の曲げが伴っていても伴っていなくてもよく、「中立化」している。数詞だけではなく、他の語彙のバリエーションにも並行する例が観察される。たとえば、「本当」や「歩く」を表す語彙では一般的には親指を曲げるが、話者あるいは方言によっては伸ばして表現することがある。このうち、前者は他の 4 本の指を伸ばした表現（写真 3）であるが、後者は伸ばしているのは人差指と中指のみ（写真 4）であるため、「親指対他の指」という物理的な構造は、その要因の可能性からは排除される。この言語変化には認知上の理由が存在することが推測される。

手話言語研究が歴史言語学に与える貢献

手話の歴史変化に関する観察はまだ始まったばかりで、今後、研究を進める中でさまざまな発見が期待されるが、その具体的な現象が見えてきつつある。その中には、同化や融合など、音声言語の変化と同じメカニズムでの変化が見られるものに加えて、写像性の関与のように、音声言語の観察では明らかになっていなかった要因が指摘できる。先に「数字の 9」や「本当」の例で、親指が中立化する変化の例を示した。それぞれの意味から手形の語源を考えると、「数字の 9」の場合には「5（伸ばした親指）プラス 4」からきていると考えられ、変化は伸ばした親指が曲がる方向に変化したと考えられる。一方で、「歩く」はもともと二本足で歩いている様子からできた手話であると考えるのが自然であり、親指は曲がった位置から伸ばす方向へと変化したと考えられる。一方で、同じ変化が起こらない例も観察される。たとえば、多くの手話において「飛行機」を示す単語は、5 の指のうち真ん中の 3 本を曲げ、親指と小指を突き出した形で表現する（写真 5）。「数字の 9」同様、親指を伸ばした手形であるが、親指は中立化しない。片翼が失われることになってしまうからである。音声言語において音が遺伝子として利用できるのは、音変化が、その音を含むすべての語彙に起こる、という原則による。そこに制約がかかる場合には、音環境が要因だとされてきた。さらに、ことばの形と意味との結びつきの間には必然性がないという、いわゆる言語の恣意性が、言語の遺伝子をたどることのできる条件だと考えられてきた。一方で、手話言語における表現の変化を説明するときには、上で述べた「飛行機」の例のように、その反対の概念である写像性を抜きにして語ることはできない。もしかしたら、これまで研究対象となってこなかっただけで、音声言語にも並行する現象があるのではないだろうか。手話言語に関する研究成果を取り入れることで、人間の言語に関する知識がいっきに広がりそうな気がする。

写真 5　日本手話の「飛行機」（S_{54}）。親指を曲げると片翼になってしまうため、$S_5 > S_{(5)}$ という変化は起こらない。

きくさわ りつこ

国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授。専門は、オーストロネシア諸語を対象とした歴史（比較）言語学および記述研究、比較統語論、言語類型論、オセアニアの先史研究。論文に The Austronesian language family (*The Routledge Handbook of Historical Linguistics*, pp. 657–674, 2015), Malagasy personal pronouns: A lexical history (*Oceanic Linguistics* 53(2): 480–516, 2014, with A.K. Adelaar)、編集記事に Where Sign Language Studies Can Take Us（うち “Introductory essay: sign languages are languages!” を執筆）（*Minpaku Anthropology Newsletter* 33, 2011）など。